

平成22年3月16日

## 第61回農薬専門調査会幹事会審議農薬の概要

## 1. アセフェート

## (1) 用途

殺虫剤

## (2) 審議の経緯

いわゆるポジティブリスト制度導入に伴う暫定基準値が設定されており、2008年7月8日付けで厚生労働大臣より意見聴取がなされている。2009年11月25日に開催された第36回総合評価第一部会において一日摂取許容量（ADI）が決定した。

## (3) 評価の概要

試験結果から、アセフェート投与による影響は、主に赤血球及び脳 ChE 活性阻害及び血液への影響（貧血等）として認められた。催奇形性及び生体にとって問題となるような遺伝毒性は認められなかった。発がん性試験において、ラット雌雄で鼻腔腫瘍が発生し、マウス雌で肝腫瘍の発生増加が認められたが、発生機序は遺伝毒性メカニズムによるものとは考えがたく、本剤の評価にあたり閾値を設定することは可能であると考えられた。

各試験で得られた無毒性量の最小値は、ラットを用いた1年間慢性毒性/発がん性併合試験の0.24 mg/kg 体重/日であったので、これを根拠として、安全係数100で除した0.0024 mg/kg 体重/日をADIと設定した。

2. アシフルオルフェン<sup>1</sup>

## (1) 用途

除草剤

## (2) 審議の経緯

いわゆるポジティブリスト制度導入に伴う暫定基準値が設定されており、2008年3月11日付けで厚生労働大臣より意見聴取がなされている。2009年8月26日に開催された第26回確認評価第一部会においてADIが決定した。

## (3) 評価の概要

試験結果から、アシフルオルフェンナトリウム塩投与による影響は、主に肝臓（肝重量増加、肝細胞肥大等）、腎臓（腎重量増加、腎炎等）及び血液（貧血）に認められた。催奇形性、繁殖能に対する影響及び生体において問題となる遺伝毒性は認められなかった。発がん性試験において、雌雄マウスで肝腫瘍及び前胃乳頭腫の発生頻度増加が認められたが、発生機序は遺伝毒性メカニズムとは考え難く、本剤の評価にあたり閾値を設定することは可能であると考えられた。

各試験で得られた無毒性量の最小値は、マウスを用いた2年間発がん性試験

<sup>1</sup> アシフルオルフェンは、ラクトフェンの代謝物の1つである。

における 1.0 mg/kg 体重/日であったので、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.01 mg/kg 体重/日を ADI と設定した。

### 3. ラクトフェン

#### (1) 用途

除草剤

#### (2) 審議の経緯

いわゆるポジティブリスト制度導入に伴う暫定基準値が設定されており、2006年12月18日付けで厚生労働大臣より意見聴取がなされている。2009年12月9日に開催された第28回確認評価第一部会において ADI が決定した。

#### (3) 評価の概要

試験結果から、ラクトフェン投与による影響は、主に肝臓（肝重量増加、変異肝細胞発生頻度の増加等）、腎臓（腎重量増加、色素沈着等）及び血液（貧血）に認められた。生体において問題となる遺伝毒性は認められなかった。繁殖試験において、雄ラットの繁殖能力低下が認められ、発生毒性試験ではラットの胎児に低体重及び骨格異常が認められたが、いずれにおいても無毒性量が得られている。発がん性試験では、ラット及びマウスで肝腫瘍の発生頻度増加が認められたが、ラット及びマウスの肝臓においてペルオキシゾームの増殖が認められており、発生機序は遺伝毒性メカニズムとは考え難く、本剤の評価にあたり閾値を設定することは可能であると考えられた。

各試験で得られた無毒性量の最小値は、イヌを用いた 1 年間慢性毒性試験における 0.79 mg/kg 体重/日であったので、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.0079 mg/kg 体重/日を ADI と設定した。

以 上